パリ日本文化会館（MCJP）ハイライトニュース　No.30

MCJP2019 ― No.30 作成日：Friday, December 20, 2019

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

10 月末から 12 月にかけて開催された事業につき選別して報告させて頂きます。本号が今年最後となります。皆様良いお年をお迎えください。

目次

1. 地上階展示「『旗本退屈男』幻の衣装」展と映画上映　2
人間文化研究機構・国際日本文化研究センターとの共催により、時代劇映画『旗本退屈男』シリーズで主演した俳優市川右太衛門が着用した絢爛豪華な衣装（東映太秦映画村所蔵）の展示を 10 月 22 日（火）から 26 日（土）まで地上階ホールで、また同題映画上映会を 2019 年 10 月 24 日（木）に実施しました。

2. コンサート「吉田兄弟」　3
11 月９日（土）の 15 時開演と 20 時開演の２回、地下３階大ホールで津軽三味線奏者として有名な吉田兄弟の演奏会を実施しました。

3. 展示「サムライとポール・ポワレ」　4
11 月 12 日（火）から 23 日（土）まで、足利サムライファイバーとリセ・ポール・ポワレ校が３年にわたり交流・協力した成果を披露する展覧会を地上階ホールで開催しました。

4. シンポジウム「紙芝居をめぐって」　5
11 月 21 日（木）の午前 9 時半から夕刻まで紙芝居をめぐるシンポジウムを La Petite Bibliothèque Ronde（フランスの子供向け図書館）との共催により地下３階大ホールで実施しました。

5. 公演「木の体験」　6
11 月 15 日（金）20 時開演と 16 日（土）15 時開演の２回、パリ日本文化会館の地下３階大ホールで日本の能と西洋劇の対話と競演を試みた現代演劇の公演が行われました。

6. 映画「第 14 回キノタヨ現代日本映画祭」　7
2019 年 11 月 26 日（火）、第 14 回キノタヨ現代日本映画祭（11 月 26 日～12 月７日）のオープニング式典と上映会がパリ日本文化会館地下３階大ホールで行われました。

7. 食文化イベント「京菓子デモ・ワークショップ」　8
裏千家の協力を得て、12 月５日（木）16 時から京都和菓子の老舗「末富」（1893 年創業）の４代目菓子職人による京菓子の解説と実際の菓子づくりをパリ日本文化会館のレセプションホールで実施しました。

8. 公演「沖縄組踊と琉球舞踊」　9
組踊初演から 300 年となる今年、12 月６日（金）20 時開演と、７日（土）15 時開演と 20 時開演の３回、地下３階大ホールで「沖縄組踊と琉球舞踊」公演が実施されました。

9. 展示「四国遍路」　10
日本の地方の魅力紹介の一環として、11 月 26 日（火）から 12 月 21 日（土）まで、「四国遍路」の写真、ビデオ、関連品展を地上階ホールで実施しました。

10. 講演「四国遍路とサンティアゴ巡礼～歩行から生まれる思考～」　10
地上階ホールでの「四国遍路」展期間中に俳人の黛まどかさんが「四国遍路とサンティアゴ巡礼～歩行から生まれる思考～」と題する講演会を 12 月 14 日（土）15 時から 17 時まで行いました。

11. パリ日本文化会館・日本友の会　在仏会員企業向けパリ懇談会　13
パリ日本文化会館・日本友の会の会員現地法人との連携を強化する目的で 11 月 26 日（火）16 時半から 19 時まで、パリ日本文化会館の発足経緯や中期ビジョンについての説明会と、懇親カクテルをパリ日本文化会館・日本友の会とパリ日本文化会館支援協会との共催で開催しました。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

① 地上階展示「『旗本退屈男』幻の衣装」展と映画上映

パリ日本文化会館は 2016 年以来大学共同利用機関法人・人間文化研究機構との間で連携協定を締結し、年 1 度の頻度でテーマを変えながら共同の催しを開催しています。

本年は、同機構に所属する国際日本文化研究センターとの共催で、東映太秦映画村に保管されている時代劇映画『旗本退屈男』シリーズで主演した俳優・市川右太衛門が着用した絢爛豪華な衣装 6 点の展示を 2019 年 10 月 22 日（火）から 26 日（土）まで地上階ホールで、また同映画シリーズの時代背景説明会と映画上映会を 2019 年 10 月 24 日（木）に実施しました。

上映した映画は佐々木味津三原作の同名小説を映画化した『旗本退屈男』シリーズの第 23 作目（全 30 作）で松田定次監督によるものです。主演の市川右太衛門の映画出演 300 本記念映画として制作され、中村錦之助（萬屋錦之介）、大川橋蔵、東千代之介、里見浩太朗、北大路欣也、丘さとみ、桜町弘子など豪華な配役が話題を呼びました。

映画は額に三日月形の傷のある主人公・早乙女主水之介の「天下御免の向こう傷」という決め台詞で有名ですが、彼が着用した絢爛豪華な「きもの」でも知られていました。近年、それらの「きもの」109 点が東映太秦村に良好な状態で保管されていることが判明し、今回の企画につながりました。デザインは大正時代を代表する京都出身の画家甲斐庄楠音が手がけています。今回の展示品には金糸銀糸を含む刺繍がふんだんに施された贅沢なものが含まれ、非常に見応えがありました。東映の理事をしていた市川右太衛門が「すべてをとっておくように」と言い残していたために、大切に保管されていました。来年度には日本でも展示会が行われる予定とのことです。

「旗本退屈男」が着用した「きもの」と映画のポスター展

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

② コンサート「吉田兄弟」

パリ日本文化会館は、11 月９日（土）の 15 時からと 20 時からの２回、地下３階の大ホールで津軽三味線奏者として有名な吉田兄弟の演奏会を実施しました。

今回は「吉田兄弟」結成 20 周年を記念してのパリ公演となりました。北海道出身の二人は 1977 年と 79 年生まれ。共に５歳の時から津軽三味線を習い始め、1990 年からは名人・佐々木孝さんに師事して腕を磨き、全国大会で卓越した技量を発揮して一躍有名になりました。1999 年にリリースした初アルバム「いぶき」は 10 万枚を超える売り上げを記録したとのことです。

ピンと張った弦のように緊張感のあふれる舞台上に吉田良一郎さん（兄）と健一さん（弟）の兄弟二人が三味線を抱えて椅子に座り、数回弦の調整をした後、まず弟の健一さんが「風翔音『Fusion』」をソロで弾き、続いて兄弟二人で「いぶき」を演奏しました。その後、健一さんが「Rising」、良一郎さんが「時の砂」と「彩雲」を、また、休憩を挟んで健一さんが「月光」と「深き海の彼方」「Cool Spiral」「Panorama」「ふるさと」とソロ演奏し、最後に二人で「津軽じょんがら節」を演奏しました。息の合った兄弟の切れと乗りの良い音色が満席の大ホールに鳴り響き、観客を大いに満足させました。

途中、二人は観客に手拍子を打つように誘いましたが、緊張感の張り詰めたデュオの曲で会場から手拍子をもらうのは、演奏の調子を狂わせるのではないか、と終演後二人に心配してお聞きしたところ、「時々手拍子の入り方に迷いが見られたりして、正直やりにくいところはありますが、その迷った入り方がまた可愛らしく感じられて楽しかったです。」と感想を漏らしていました。さすがにプロの余裕だと思いました。

演奏中の吉田兄弟（写真：パリ日本文化会館）

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

③ 展示「サムライとポール・ポワレ」

11 月 12 日（火）から 23 日（土）まで、足利サムライファイバーとポール・ポワレ校の 3 年にわたる交流・協力の成果を披露する展覧会がパリ日本文化会館地上階ホールで実施されました。

栃木県の足利市は繊維の町として発展してきました。その足利の高度な技術を集約して最大限に活かし、時代のニーズに柔軟に対応していくために、ネットワークづくりと全世界への展開をめざして立ち上げたのが「足利サムライファイバー」プロジェクトです。繊維、撚糸、織物、編物、染色、捺染、裁断、縫製、刺繍、製版、印刷などさまざまの分野の 11 社のリーダーから構成され、既成の境界を越えて連携し、足利の新たな未来を切り開こうとしています。

一方のリセ・ポール･ポワレ校はファッション業界のパイオニアの一人、同業界のピカソとも言われたポール・ポワレの名を冠した職業訓練高等学校で、ファッションや演劇の専門家を養成しています。

その二つの組織が 2017 年から交流をはじめ、協働した成果を披露したのが今回の展示会で、足利の技術を結集した繊維・織物を利用したドレスや着物や小物など、多岐にわたる創作品が出品されました。

1963 年渡仏以来パリ在住の著名画家であり、かつてモード記者としても活躍してきた赤木曠児郎さんは、本展をご覧になり「大変質の高いすばらしい展覧会で沢山の方々に見てもらいたい」と絶賛していました。

地上階ホール「サムライとポール・ポワレ」展の様子

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

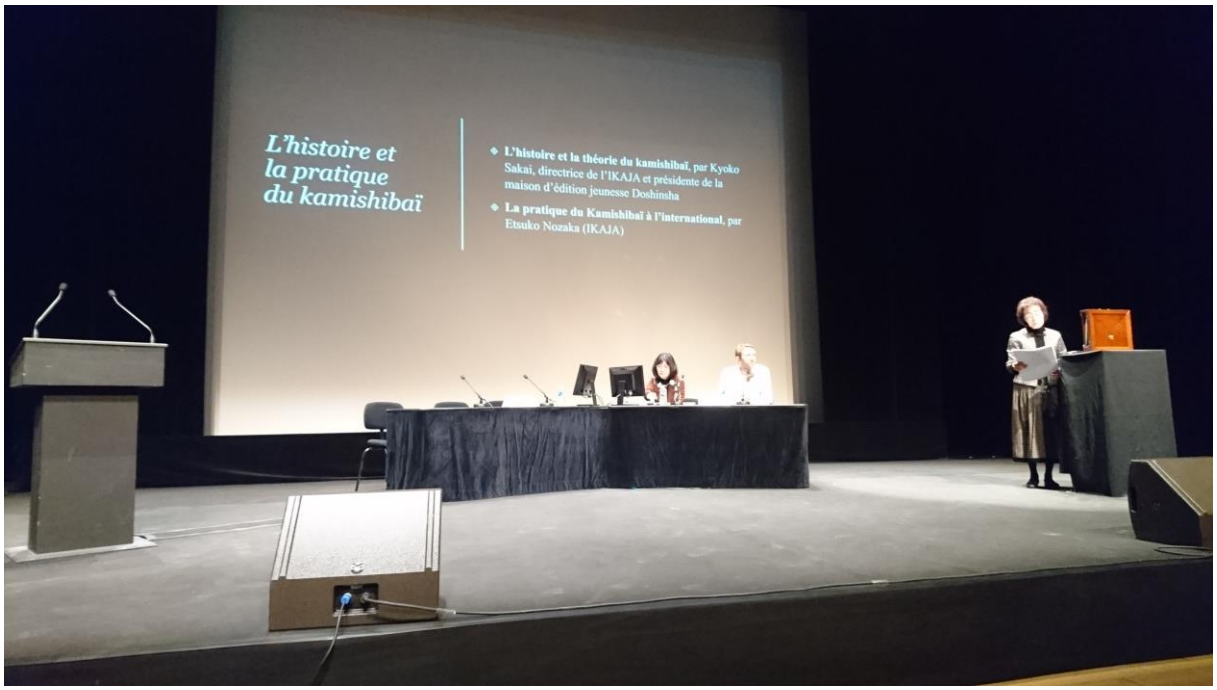
④ シンポジウム「紙芝居をめぐって」

11 月 21 日（木）の午前 9 時半から夕刻まで紙芝居をめぐるシンポジウムを La Petite Bibliothèque Ronde（フランスの子供向け図書館）との共催により地下 3 階大ホールで開催しました。La Petite Bibliothèque Ronde は「紙芝居文化の会（IKAJA）」のフランスにおける公式代表でもあり、日本の紙芝居コレクションを豊富に持ち、それらをゼロ歳児から 12 歳までの子どもたちやその家族向けに活用しています。

今回のシンポジウムでは「紙芝居の歴史」「学校における紙芝居の位置づけ」「語学学習における紙芝居の貢献」「紙芝居の芸術的側面」などについて活発な意見交換や討論が行われました。

「IKAJA」の酒井京子会長は冒頭の基調講演で次のように語りました。「1930 年代から日本で広まった紙芝居は第二次世界大戦中に戦争を賞揚したなどとして批判されたり、戦後は駄菓子を売る街頭紙芝居が子どもの教育や衛生に悪いなどとして批判されたりした時期がありました。しかし、1950 年代、60 年代にはテレビやゲームのない戦後の子どもたちの娯楽として隆盛を極め、紙芝居屋さんの数も数万人に達しました。その後、童心社等出版業界の地道な努力等により、近年、健全な教材の一つとして注目され、学校や図書館等で紙芝居が活用されるようになっています。」

紙芝居は文と絵と話術と想像力の合わさった総合芸術といえます。フランスでも紙芝居が教育材料として注目されているようで、会場の大ホールはほぼ満席に近く大勢の関係者で埋まりました。



紙芝居の歴史について基調講演する酒井会長（右手）

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑤ 公演「木の体験」

2019 年 11 月 15 日（金）20 時からと 16 日（土）15 時からの２回、パリ日本文化会館の地下３階大ホールの舞台上で日本の能と西洋劇の対話と競演の試みが行われました。

演出と舞台設計は 2008 年に京都のヴィラ九条山に滞在したシモン・ゴーシェさんです。2016 年以来パリ日本文化会館とヴィラ九条山は連携協定を結んでおり、年に１回ヴィラ九条山出身のアーティストによる講演会などの催しを共催してきました。筆者は同所へ派遣するアーティスト選定審査員の一人であり、ヴィラ九条山にも浅からぬ縁があります。

今回の競演が実現したのには興味深い話があります。2007 年にパリ日本文化会館開館 10 周年を記念して実施した金剛流宇髙能公演に出演した宇髙竜成（うだか・たつしげ）さんを客席で見たシモン・ゴーシェさんが、翌年京都を訪れ宇髙さんと再会しました。その際彼は１カ月間にわたり、宇髙さんから日本の古典劇の真髄を学びました。そして帰国するにあたり、授業料を払おうと申し出ましたが、宇髙さんはそれを受け取らず、代わりにいつか西洋劇を教えてほしいと言ったそうです。昨年ヴィラ九条山にレジデンスしたゴーシェさんは、宇髙さんとともに「木の体験」を共同制作し、10 年越しの念願を叶えたのです。

本舞台は古典能と西洋劇双方の概念の伝承の場にもなっています。ゴーシェさんは西洋劇では役者のせりふと身振りが重要であることを示しますが、宇髙さんは能では「木に宿る精霊」と「舞台の周りにいる幽霊の気配」等を感じながら演じることが重要であることを伝えます。舞台に設置された木の幹や枝々とジョアキム・パヴィさんによる木に宿る精霊の声のような音楽の演出も非常に効果的でした。感動に包まれた観客席からは終演の挨拶に立った三人に惜しげない拍手が送られました。

「木の体験」終演の挨拶（左から宇髙さん、ゴーシェさん、パヴィさん）

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑥ 映画「第 14 回キノタヨ現代日本映画祭」

11 月 26 日（火）から 12 月 7 日（土）までパリ日本文化会館で開催された第 14 回キノタヨ現代日本映画祭のオープニング式典と上映会が初日の 11 月 26 日（火）に地下 3 階大ホールで行われました。式典では同映画祭実行委員会の片川喜代治会長、駐仏日本大使館阿部康次公使、ヴァル・ドワーズ県のジェラール・ランベール＝モットゥ議員、筆者、同映画祭実行委員会ミシェル・モトロ名誉会長の挨拶の後、ゲストとして来仏した映画「ターコイズの空の下で」の KENTARO 監督と主役の柳楽優弥さんの挨拶があり、続いてその日に上映される映画「典座-TENZO-」の富田克也監督と役者を務めた二人の僧侶、河口智賢（ちけん）方丈と福島県の倉島隆行（りゅうぎょう）方丈、の舞台挨拶がありました。

映画「典座-TENZO-」の内容と狙いは次の通りです。10 年前大本山永平寺での修行期間を終えた兄弟子の隆行と弟弟子の智賢は自らの生まれた寺へそれぞれ戻っていきます。智賢は山梨県にある禅寺の住職である父と、母、妻そして重度の食物アレルギーを抱える 3 歳の息子と共に暮らし、いのちの電話相談、精進料理教室やヨガ座禅などの活動を続けています。隆行は東日本大震災で福島県沿岸部にあったお寺も家族も檀家も失ったため、仮設住宅に住みながら震災の瓦礫撤去の作業員として生活しています。この二人の僧のひとりの人間としての苦悩と仏道への思いを通じて、人間とは何か、仏教、宗教の意味を私たちに問いかけ、考えさせます。素人ながら熱演している僧侶の演技が心をうちました。

非ノミネート作品である「典座-TENZO-」や「ターコイズの空の下で」など 4 作品を含めて全 15 作品のうち 13 本が、12 月 7 日（土）まで当館で上映されましたが、平行してパリ 17 区にあるクリュブ・ド・エトワルでも 11 月 29 日（金）から 12 月 8 日（日）まで 13 本上映され、12 月 9 日（月）にはギメ美術館で閉会式があり無声映画「狂つた一頁」が、12 月 11 日（水）には日仏友好議員連盟アラン・トゥーレ会長の協力により、フランスの国会で金賞受賞作品「カツベン！」が特別上映されました。

第 14 回キノタヨ現代日本映画際オープニングで映し出されたノミネート作品

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑦ 食文化イベント「京菓子デモ・ワークショップ」

12 月５日（木）16 時から 1893 年創業の老舗「末富」の４代目山口祥二さんとその同僚の坂山孝洋さん二人の菓子職人による京菓子の解説と実際の菓子づくりをパリ日本文化会館レセプションホールで今年も実施しました。本イベントには毎年裏千家のご協力を頂いています。

当日はフランスの交通機関のゼネスト初日でしたので、予約した方々が集まるかどうか心配しましたが、結果的には４２名の方々が参加しました。親子での参加者や、学生さんのグループも大勢見かけられました。中にはパリ市の東の端から西の端にあるパリ日本文化会館へ自転車で来た熱心な方もいました。

前半の３０分ほどは、テレビモニターを使って月ごとに変わる季節感あふれる京菓子のデザイン、続いて小豆あんのつくり方、そして参加者が実際に作る京菓子のつくり方の説明がありました。その後、参加者全員による三種類の京菓子づくりが始まりました。最初は長野県で生産される「氷餅」をまぶした冬のお菓子、次に白と緑のあんを使ったお菓子、最後にきんとん通しで濾したそぼろ状の緑のあんをまぶし、それに飾りをのせるクリスマスツリーに見立てたお菓子を作りました。フランス人の参加者が過半を占めていましたが、皆さん器用な手つきでお菓子作りを楽しんでいました。

河瀬直美さんの映画「あん」が 2015 年にフランスで上映され、それがヒットして以来、フランスでも和菓子人気が高まり、会館の地上階に出店している国虎屋さんでも、お昼におにぎりとどら焼きをセットで食べるフランス人を多く見かけるようになっています。

京菓子の作り方の説明を聴く参加者

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑧ 公演「沖縄組踊と琉球舞踊」

12 月 6 日（金）20 時開演、7 日（土）15 時と 20 時開演の 3 回、地下 3 階大ホールで「沖縄組踊と琉球舞踊」公演が二部構成で実施されました。第一部では、琉球王朝時代に宮廷内で誕生した琉球舞踊の三題、沖縄発祥の空手の所作を採り入れた勇壮な男踊り「高平良万歳」、極度に抑制された動きで愛する人を想う女心を表現する「諸屯」、そして男女の恋模様をおおらかに軽快に踊る「加那よー天川」が披露されました。

第二部では、組踊が上演されました。組踊は中国から琉球を訪れる国賓、冊封使を歓待するための芸能として、1719 年に初演されました。大和や中国をはじめ、近隣諸国から様々な影響を受けつつ、独自の芸能文化を築き上げてきた琉球ですが、組踊はその中でも、琉球の総合芸術といわれています。組踊は、台詞、音楽、踊りの三つの要素から成り立っていて、聞きどころの多い舞台芸能となっています。役者の心情表現を、地謡（音楽）で表現する点や、役者の台詞自体が一定の旋律を伴ったスタイルで発せられるのも特徴的です。

上演された組踊「執心鐘入（しゅうしん かねいり）」は、能の「道成寺」を下地に、当時の琉球の風俗や中国の儒教的倫理観を反映した形で創作されています。中城若松という美少年が、首里王府へ向かう途中で日が暮れたため、一軒家に宿を請いますが、宿の娘は、親が留守だからと断ります。しかし、若松が名を告げると、評判の美少年と気づき、家へ招き入れます。かねてから若松に思いを寄せていた娘は、若松に思いを打ち明けようとしますが、若松はそれを断ります。しかし高まる思いを抑えることの出来ない娘に、若松はいたたまれなくなり、末吉の寺へ駆け込み、救いを求めます。宿の娘は、必死になって若松を追い、寺へやって来ますが、若松が見つからないため、とうとう鬼女へと変身してしまうという物語です。

沖縄組踊「執心鐘入」終演後の挨拶

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑨ 展示「四国遍路」

パリ日本文化会館では日本の地方の魅力紹介にも力を入れています。その一環として、11月26日（火）から12月21日（土）まで、「四国遍路」の写真、ビデオ、関連品展を地上階ホールで実施しました。

総行程1400キロの四国遍路は精神的模索とともに豊かな文化遺産や素晴らしい自然の発見をする旅でもあります。

地上階ホールでの「四国遍路」展

本展を見た来場者の中には自ら「四国遍路」を２度経験し、『Le Pélerin de Shikoku –un chemin d'éveil au Japon – （四国巡礼ー日本での発心の旅路ー）』（Édition Transboréal, 2018）と題する本（日本題は仮訳）を書いたニューカレドニア出身のフランス人ティエリ・パキエさんもいました。

⑩ 講演「四国遍路とサンティアゴ巡礼～歩行から生まれる思考～」

地上階ホールでの「四国遍路」展期間中の12月14日（土）、俳人の黛まどかさんが「四国遍路とサンティアゴ巡礼～歩行から生まれる思考～」と題する講演を行いました。

12月5日から交通機関のゼネストが続く中、会場の入りが心配されましたが、会場に入れないキャンセル待ちが40人に上り、フランスにおける「四国遍路」人気の高さが窺われました。実際、本イベントを企画したNPO法人遍路とおもてなしのネットワークによりますと、「四国遍路」を完歩する年間3、4千人のうち1割以上は外国人でその過半がフランス人だということです。

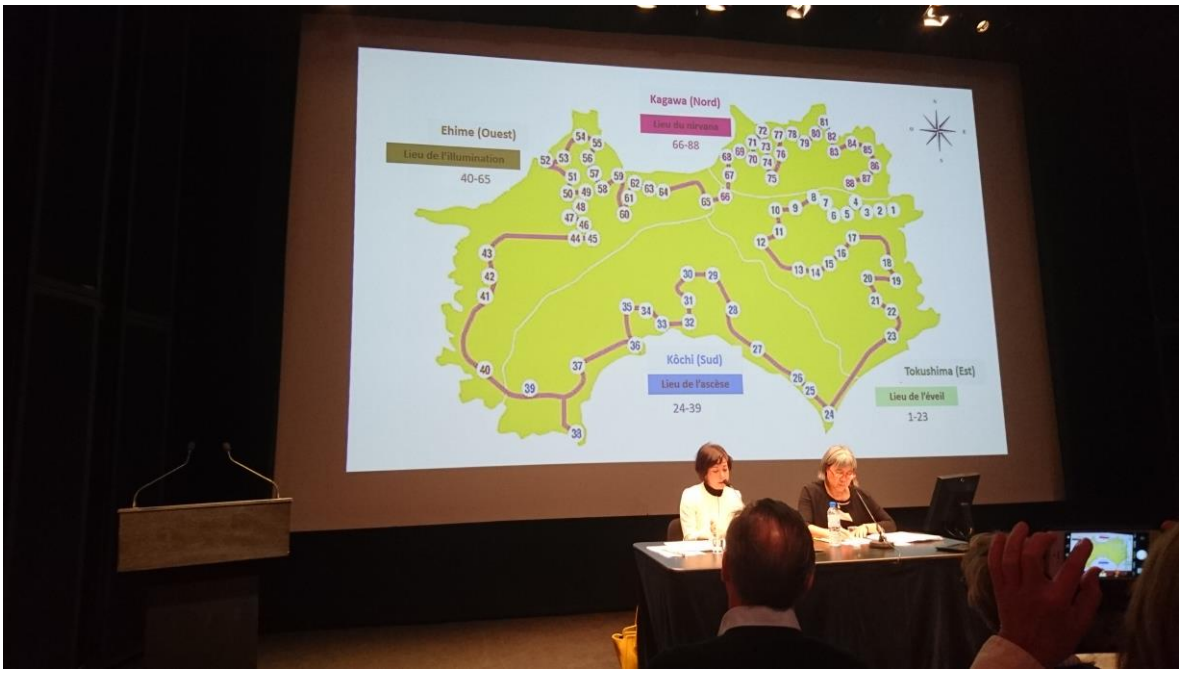
注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

冒頭、黛さんが「サンティアゴ巡礼と四国遍路に行ったことがある人はいますか？」と質問したところ半数近くが手を挙げたのにまず関係者一同びっくりしました。ストのため当館まで歩いて来た人も 20 人近くいました。

宗教的にも地理的にも非常に異なる四国遍路とサンティアゴ巡礼ですが、「歩く」という点では共通しています。

自らも 900 キロのサンティアゴ巡礼と 1400 キロの四国遍路を経験した黛さんは、前半は 2017 年 4 月から 50 日間かけて行った四国遍路の話を、後半は歩くことと思索についての話をしました。

四国遍路は 8 世紀の修験道に起源を持ち、空海が 10 代の時に修行のために行脚したことから弟子たちがその足跡をたどるようになり、17 世紀の江戸時代になって大流行したそうです。徳島から時計回りに高知、愛媛、香川と巡り、4 県にある計 88 の札所をお参りして「結願」します。その 4 県はそれぞれ発心、修行、菩提、涅槃に相当します。携帯する金剛杖は空海の化身であり、空海と常に一緒にいる（同行二人）ということを意味し、いつ行き倒れになっても良いように金剛杖は卒塔婆の形をしています。身に着ける白衣は死者として巡礼するとの意味合いもあるようです。



講演する黛まどかさん（左）

遍路の最適の季節は春とのこと。俳句でも遍路は春の季語になっています。初めの１～3 日は桜や花々の咲くのどかな風景の中を歩きますが、3～4 日目には「遍路ころがし」と呼ばれる険しい道となり、ほとんどの人が膝の痛みを感じ、足にマメができて苦しむそうです。黛さんも例外ではなく、医師にかかって３日ほど遍路を休止したとのことです。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

さて、「サンティアゴ巡礼」と「四国遍路」の共通点や相違点について外国のジャーナリストからよく質問があるそうですが、それについて黛さんは次のように述べました。

―「サンティアゴ巡礼」の道は神聖な大聖堂を目指して東から真西に伸びているが、「四国遍路」は回遊式で無限の円環を巡る旅である。そのため、美しい花々にかがみこみ、大樹の陰に憩うような寄り道の多い黛さんの歩き方は、一心不乱に一刻も早く目的地に着こうとする西洋人には巡礼ではないと映るようです。黛さんはその違いを、西洋はひたむきに信じる宗教であり、日本は自然に宿る神々を感じる宗教であるという点にあると考えます。また、西洋人は「神が世界を創造してからの直線的時間感覚」に親しんでいるが、日本人は「この子は何かの生まれ変わり」という「死んで終わらない」輪廻の考え方に馴染んでいるという違いがあるとも考えます。

―「サンティアゴ巡礼」は東から西へ歩くので、朝は太陽が後ろにあり、影は前にできる。夕は太陽が前にあり、影は後ろにできる。朝は影が行く末を指し、夕は影が来し方を指す。その直線運動の最後には広大な海を望む「地の果て（フィニステール）」が待ち受けている。

―「四国遍路」は歩行のリズムからして「目に見える世界」から「見えない世界」への逍遥であり、表層から深層への探求の旅といえる。この揺らぎのような感覚は、俳句をつくるうえでも古典を理解するうえでも重要である。歩くと五感のアンテナが立っていき、蝶や波の音、花の匂い、などを感じ、自然が人間と不可視なものとの関係を築いてくれる。芭蕉の句「山路（やまじ）来て何やらゆかし菫草（すみれぐさ）」にあるように、旅人の記憶を道端のすみれが記憶し、すみれを見ると過去の旅人の想い、未来の旅人の想いが感じられる。歩いているとこの世とあの世、現在と未来、他者の命と自分の命が共感し、見えないものとのつながりを感じるようになる。

―香川県の最後の札所に着くころには誰もがやつれはて、沈黙の面持ちになる。道中寡黙であったそのうちの一人が黛さんに向かって「もうすぐ結願ですね。きっといいことがありますよ。」としんみりと声をかけてきた。彼は自分が結婚もせず孫も見せられずに親不孝をしてきたので両親の遺骨をリュックに入れて遍路をしてきたといい、「きっといいことがありますよ、あなたにも、私にも」という言葉を最後に発した。黛さんには彼が初めて自分を認めた瞬間のように感じられた。苦労して歩くことは自分自身の功徳にもなる、遍路は自分自身との和解である。そして、遍路は「人生の迂回をあえてするようなものであり、苦しみや悲しみを解き放つこと、そこから紡ぎだされる言葉を私は詩と呼んでいる。21 世紀は宗教戦争で始まった。それを四国遍路が解決することを望みたい」と締めくくりました。

会場の中には質問をする際に感極まって泣き声になる観客もいたほどに、感動的な講演会となりました。

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

⑪ パリ日本文化会館・日本友の会　在仏会員企業向けパリ懇談会

パリ日本文化会館・日本友の会の会員現地法人との連携を強化する目的で、11 月 26 日（火）の午後 4 時半から 7 時まで、日本友の会会員の在仏企業、20 社 29 名の方にご参集いただき、パリ懇談会が開催されました。日本友の会の在仏会員企業が、パリで一堂に集まるのは、開館以来のことではないでしょうか。

第一部の説明会では、日本友の会の斉藤幸博事務局長より、パリ日本文化会館と日本友の会の設立趣旨と発足からの経緯、組織体制について説明された後に、課題である「支援価値の見える化」について、日本国内での認知向上のための広報と SNS 発信の強化の必要性と、会館が現在の国際社会、日本の状況に合致するビジョンやミッションを持つことにより、日本友の会にとっての支援価値が高まることを話されました。

筆者からは、パリ日本文化会館の今後の方向性を定めた中期ビジョンについて、「日本のステータス向上」と、「国際社会の羅針盤」というふたつのミッションを定めて取り組んでいることと、その実現に向けて、日本友の会会員の皆様のご協力をお願いいたしました。

日本友の会の早川茂会長からは、日本が経済大国から文化大国に向かっていく中、官民共同を理念とするパリ日本文化会館が、このような社会認識や課題に適合するビジョンや目標をもち、その実現に向けて活動されることを、日本友の会の会員企業の皆様とともに強く期待したいとのお言葉をいただきました。

支援協会の浜田真司パリ事務局長は、支援協会が考える会館と友の会会員企業の今後の連携のあり方について、企業文化発信の重要性について説明し、その実現に向けて、日本友の会の皆様のご協力をお願いいたしました。

第一部の説明会で話をされる早川日本友の会会長（写真：日本友の会事務局）

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

作成者：館長　杉浦 勉　t.sugiura@mcjp.fr　https://www.jpf.go.jp/mcjp/member/news.html

第二部の懇談会は、来賓の木寺昌人駐仏日本大使より、パリ日本文化会館が官民の協力によって運営されることの重要性と、日本友の会の皆様のご支援への感謝を述べられました。

参加された会員の方からは、友の会の役割、会館の掲げるビジョンと目指していることを詳しく知ることができてよかったとの声をいただきました。また、意外と初対面どうしの方もいらっしゃり、ネットワーキングの場としても機能していたようでした。

今後も、日本友の会在仏会員企業の皆様との連携を密にして、パリ日本文化会館が、文化発信を通じ、日本のステータス向上と、国際社会の羅針盤となれるように取り組んでまいりたいと思います。

第二部の懇談会の模様（`写真左手で歓談する早川会長と木寺駐仏大使; 写真：日本友の会

以上

注記：本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一的見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。